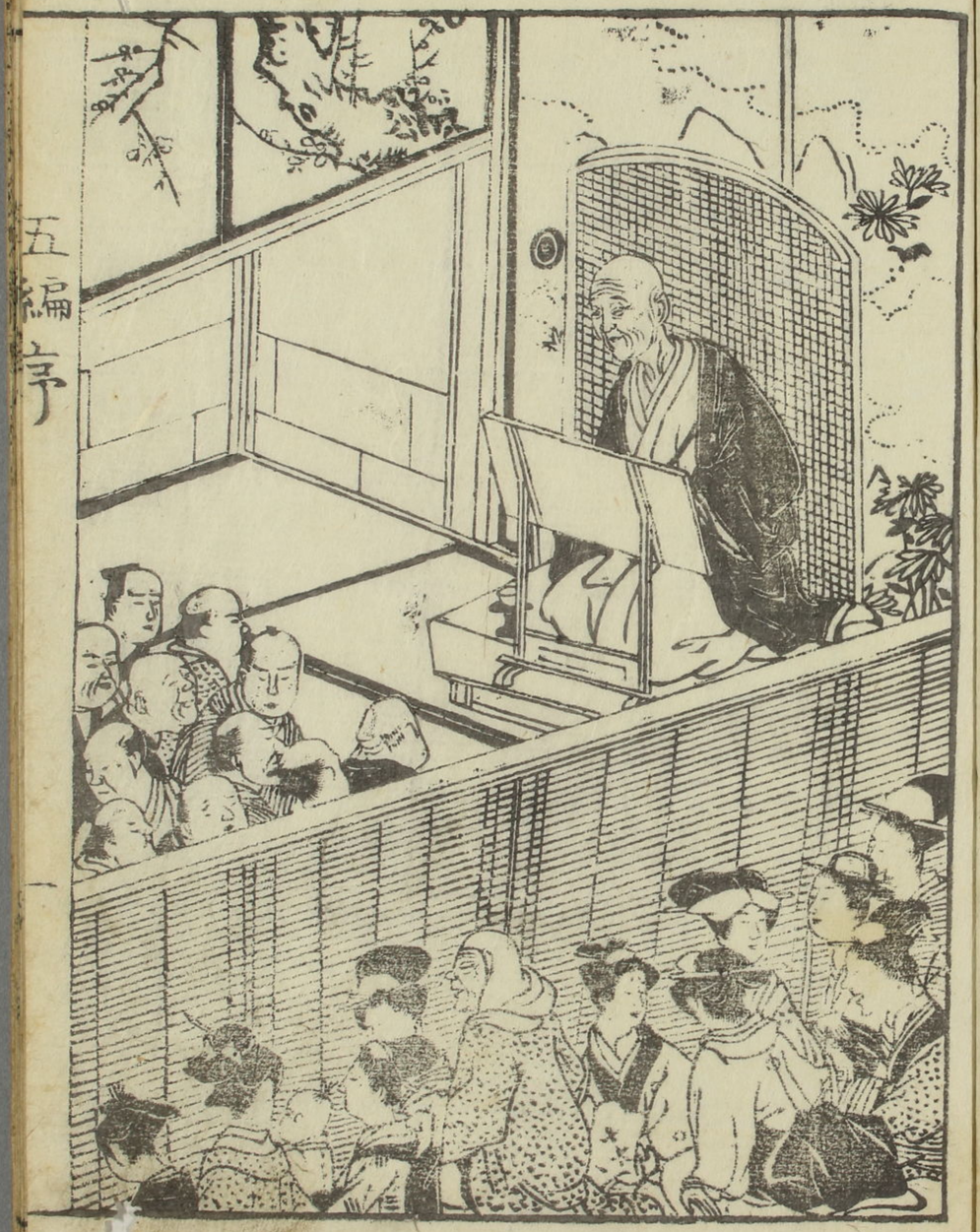
9
3406
10



故
櫻井理行氏
大正四年
十二月廿三日
櫻井文吉氏
寄贈

櫻井家藏書

門 口9
號 3406
卷 10

中澤道二翁像賛

奇才黄耄儼然在牀
窮理明察語道精詳
生於京洛終于逹陽
著書五卷令名長香

平安堂河正揚題

道一翁道話序

子曰。天地之性人爲貴人之行莫大於孝と。
爰天地の為ものを生々するの中に於て。
人は天地の精氣をうけ生じるものなり。
四支百骸ありて。仁義禮智の性を備へて。
萬物の靈となすとは。人より貴きはなし。
あゝ孝敬ふかく踐履ふかくして。
子爰婦貞淑朋友の交りは。
用ゐまつ為にあらず。
あゝ孝敬ふかく仁義

の道よりあらざいなくして。そもそもうえ
なくして本末始終あるべし。其根を培養
を書とにあるべし。語曰。君子務本。本立
而道生。孝弟也者。其爲仁之本與。故
孝弟さんなくして。其根培養なし。五倫の更り
なり。さ條日用家業稽古奇人の
ちなり。如何とあらば。先王教化
不忠あるべし。父母乃ち安らずあるべ
らくあるべすなり。こゝを以て
あらく不仁なれば。父母の心安らずす。故に
ふらく仁惠を欲して省すなり。又夫へ妻と
なくして貞操あるべし。父母の心安らず。故に
なくして節操をなくして貞操とはなる也。
夫あるして妻へ義和を失ひ。ふわ合らんば。
父母のこゝろ安らずあるべ。故に結婚あるべき。
別義を正さくして。夫の妻と妻たるべ。
まくして弟さくして敬義を失ひ。兄を背そむ。
父母の心安らずあるべ。故に恭敬ふ

ら〳〵第の義をはたすあり。又人〳〵て
友愛に違ひ不和合あれば。父母のん
安らしめず。あふこうるく背き乖戾恵みて。
兄の義をつくさにあり。又朋友のあいだ
互ひに信實を尚ひ。更に一もまこと。
父母のふ安らしず。あふ朋友の更り
ら〳〵信實と尚ひあり。まこと家業を怠
きば渡世乏しく。父母のん安らしず。故
ふ孝更深しる職業を大切〳〵。力伐

盡すあり。それ日月衆事を照。少し
みることるを尚ふとさい。父母のん安〳〵
を。あるを平生語默動静の間。戰々兢々と
して。唯音誠をもつくされば。孝道
全うす。故曰孝德之本也と。一孝立而
萬善從之とあらずや。さればこそ人〳〵
氣質の更るる容〳〵違ることなくして。皆明清濁
せわ〳〵。性善を失ひ孝道と行ひ

ばくこそ。あるべけれ。かゝる聖人ならずんば教を設け。致知格物より。誠意正心修身に至るべきや。いまや中澤氏の著作に活とまる。神釋老莊の語より。百家衆技。狂言綺語を交へ。縱横自在に呼吸する。演說はしるべし。其要唯人々として固有の性を見得し。其性を盡し。かの孝悌を行ふの道のみなんや。

翁名は義道。亀屋久兵衛と稱し。世〻平安の人なり。享保十年乙巳秋八月十日。上京烏丸一條北街。中澤氏の家に生れ給へり。幼少より。父と伯母に孤職を業とし。二十四孝の内。居を中筋に卸の任ずるに遷せり。されども文字を平日書よむ事もとなく。かゝる文字を躁ることと。あるべし。儒佛の教を

信じ。家職乃才隙をこゝろ。所々の講釈法談乃席にはゝ。又へ宿儒高僧の許よりこゝろ。道の大原を研究すること年久しゝ。後或梅巖石田先生の教を仰し。手島堵菴先生に親炙して。性理乃蘊奥をきわめ。五十五歳乃春。剃髪もつて道二と没名し。師の許可を受て。わかゝ乃秋東都にいたり。みちを

うしなとて。元二十余年ちゝ其間京師に帰注し。或い東国北国に赴き。もつぱら浪花南紀乃間に遊説し。丹但播陽乃諸州に行くこと数ちゝ。其間京師に帰注し。或い東国北国に赴き。もつぱら浪花南紀乃間に遊説し。丹但播陽乃諸州に行くこと数ちゝ。其間京師に帰注し。或い東国北国に赴き。もつぱら浪花南紀乃間に遊説し。丹但播陽乃諸州に行くこと数ちゝ。

きゝ。ものを聞人ゝ。ものを集し。ものをしへるものゝ。ものゝ人ゝ。ものゝ奇才卓越乃人ゝのふ。ものゝ。ものゝ仲夏ゝゝ。ものゝ。ものゝ。もの

の中か孫りあまりあり。寿年七十九歳
ちなみに。なかばすぎ二十四日なを歳の妙壽寿
りおくり葬るもあれしかれども。うれ発引
の日おくりうちすぐれ社交。きたちく
姑やうく。数ふ人よ及ばるん。嗚呼翁い
亦石門の雄俊。成功の人といふべきか。
況日況筆の書肆某。うれ之を話五篇
おくりものと梓よ上し。学ふ乞せむとて
序を予か求む。予翁と平ふか断、

金の文をとりて。強くいあるがうく。拙くさ
学を執る。おのいとある人を萬物の霊
みて。五性全く備りうの性吾のごとり。
うもちりふみ。多かか杜あふ引之ちく。
まうれ孝の根本。そもそ父母よ孝を
はくしふもそまうく。百行之源万善之
長あれの大器と志べ。ちりくるいうりあ
いけるの義を伝思器を出ふして。こを
が序とれく。書肆うれ乃需み

為ばくこふ。

享和三年癸亥冬十一月

洛東　入江致身子忠識

於茶敬舎南窓之下

道二翁道話五編巻之上

浪華　八宮齋　輯

大哉乾元萬物資始乃統天雲行雨施品物流形乾道変化各正性命天與樂寔面白有様哉何をかいてう

こしを加へん

先い石田先生易の彖傳の辞を引て。都鄙問答の序とするさしこのでばざりまで先生方御説解も多くばざりまましバ。和まほしとおもふるまどゝ。ぶんと其大体をやさしませう。先此大哉とい。早老かぎりのるいすとやさしのぐ。大小のかてまる大でいばざりませねゝ。俗流女中方の耳さへ

よいやうなは。扨も〳〵大きなるものじゃ。又乾元とも天の
御徳を名付たるのでゐるの事じゃ。なぜ道なる。ゐると
いへい。神道佛道。平等一枚隔いない。神ゐでいへば神の道
の事。佛ゐでいへば佛の道の事。儒道でいへば儒のゐのもと。
此乾元の天徳で世界中ゞ繞ひつゝまれてゐるれど。見ぬ
ゐんえぬふ〳〵ぎるものじゃ。陰陽弁障して雲行雨施し
乾道変化して。ゐて〳〵揆〳〵敢地をあらいし。一切万物人間い
いよ及ぶ。禽獸草木山河大地幽谷砂石の数まるまるぐ。
其敢の形〳〵をのく〳〵其性命を正しうして。天のあるる
楽をい。人は人のゐ。養いちう〳〵。鳥かいあく。已〳〵ゞ

道を尊し。柳いをどりよ花い紅。山し天命よ背くもの
いるい。なるけ人い万物の中でも。るひ天上で五倫五常の天
徳ゞ身よ授りてある故人ゐの人の勤め行ふて。毎のく
其性命を正しうもる。自性自然ゐ大安楽を天うしゐ人
ゆうる。何とんでも此うへ加へん。何ゐ求うん。扨〳〵
みゝ雖く実に西白きみ授うると。故先生の所説びみるまる。
序文でござりまして。天うし此世界の霊明の学ゐ
を受得て何ゐ求ゞあるぞみ雖いるゞじゃござりませぬ。
愚るの白人〳〵已よ美き物あり。ゐ恐上〳〵様方も釋迦も
孔子も老聃も盗跖も猶〳〵ゞも獄者も乞食も犬も猫

も孤も獲も撥も然も明徳こそうりいない。万物一体じゃ。甚の中でも人ぢりこそ最理と体へて。万事こそ意どる知恵がある。此知恵で遠ひがあいまゆへ教へこそ孫ぢなしこそ此知恵こそ人が何でかまんこと物のもうこそこそて居る。何こそも別の物じゃない。此五こそうゆこそう。光こそう知りこそもる。自性自在こそ天徳を蒼こそ名じゃ。此徳い天地こそ貴こそいる。ぢんど同こそ見へるもの〻じゃない。こで気みこそ動くぢけう。新も敢もない。光こそ隠こそて見こそば遠こそ物の孫こそ孫こそるものこで物来こそが移こそ。去こそ一が孫こそ孫こそ。物こそ向こそ移こそまいこそいこそもこそ。こそ物来こそ移こそ移こそこそもこそ。こそこそうこそ。こそ

こそうこで。こそうこそ捨こそこそもこそ。こそこそこそこそ。知こそこそ知こそこそこそう。こそこそ行俊宣こそりの〻じゃ。こそ我思案こそ別こそ合こそこそこそ。どこそるこそこそこそ居る。別こそこそ仕ゆこそのこそいこそのこじゃ。こそこそこそこそこそいこそのこそこそこそこそ。即今こそ見こそ見こそ。こそこそこそ光こそ見こそりの〻じゃ。最理こそ体へて万事こそ意どる事こそ仏こそ体こそこそこそこそこ

本心と知るといふ。けまだ此石程が明らか勝い者じゃ。去る
まで迷ひが多い。それど迷ひ迷ひ。ひるげうも天徳が備りてゐ
ゆへ見聞見知の角ばが出来る。ソコデ我でも我とも毎うまか
りし居て。毎まづ目でみる。扇じゃと毎まづ心で知る。よく
こ我でもちやんと悟明て。我一人者に見さり安さり。とるく
と見へ迷ざりのじゃ。其見迷ざるゆふ天の徳でして
居るとはまづじゃ。ソコなら我とるく。ちつと恩愛が迷ひ
ぬく安も其を乱を安堪よふこと出。実ふは乱とちつと
りのがあるくとちつて居る。恩愛を入れてゐると。何ふも生
乱をとるりのいないもせぬもの。ソコデ一体和尚の者に我乱よい

せぬぞどこへも紛れてゐる易孫いとるるあいいる反で。此の
縁いは滅とれど。心よは滅いるい。此縁も生滅とる毎うるま
ど。乾道義乱の内るれが実に生滅とるでもない。でも陳ひさ
へせるや。此恩愛も福ちうう悪いりのじゃない。直ふ乾る義
乱の知恵じゃ。ふ石転石石転造るも印籠巾着の細ふとる
も皆天の恩愛でもうひてゐるのじゃ。世界いで一人秋
も新もない人ぐでもあくく動くぐんうりじゃ
陳らぬ歩ふたまうぬのの涙ふとる新もいてもない人ぐ
水汲ぐり飯焚ぐり実ふ面白きあうきまるる。何とんてう
生ふ加へん。サア実ぐみ雑い者じゃ。それど今一城安へ勝い。

天で今日のみ雖いまの知る所。志を成さんばかりやあんまり大きナニまんてじゃ。是とぞんじ入が乾元こは天の世界の石じゃ。此宝の掘の下でもただこの中でも明と和合する宝志や。天窓の上の書いた宝じゃ。此日様の出る所まで二百七十万里と申いまが。まだ其上も宝じゃ。釋迦も孔孟も。不可思議とふてござる。敬あるい斗ゝ立る。大地い何ぞ。なりても敬地がある。天竺でも長崎でも斗立る。敬のない石いども斗ゝ立ゝ。ふゝしぎじゃ。ふゝしぎとは何ゝも無ひとゝふてゆるゝ遠じゃ。斯い天気が濁切てゆゝ弓対る矣が志。水いの宝が二つ

ある。一つでい水が這入ぬ天と水とゆうまんてぶ〳〵〳〵と沸羅尼と唱へ〳〵這入。何と能〳〵こりのゆ矣でこゝまで天の濁て。ゆるゆを出合点ゆさうませ大地い天の壊をさりじゃ。則天の肉じゃ。矣でんい天の種じゃ。志ゆ。

天地のゆを相續をるものゝ人じゃ。其人が天地のゆを胸いで欲が深ひゆ人目が明と何がゝ〳〵。明〳〵〳〵。

まいどゝ世う秋いどゝ世う。何といゝも金のゆじゃ。金がゆけとばどふもなりぬと。人の雖我もかまうぬ〳〵。

矣うゝ人の道を出ひ。矣為分数瓶つさ。心中分授首極。

さもなくば愁ひ矣雖困窮ゆゝ。妻ゆと矣ひ雖病

業病癈とまでよわくなる。水を腐にいつけまこと天の御刑罰。
遊るくるのいたらぬうらまれ濃厚を後悪科と仰りて遠くふる所。
人ごけうへの教へじやや。外のものゝ教へいつゝ一切万物。
世の道くゝが道の通り。苦るゝ為のまゝ孫もせじ。天が描の
分ぶり物まゝもせじ。素咲花い春さき。朝ごけゝが為ごと咲
さゝもたゝく。き菊い寒ゝ咲く。結天命ゝ順ゝ合其性命
をこゝとる。其根元い天ゝ繞ゝ。ゝ一切の万物と天ゝ外ゝ
ゝてござるゝれど此肉眼でゝ人ゝるものゝじやない繞ゝ
と雖ゝてゝ人ゝ世ゝうゝれゝ業をせんゝゝる小義乳湯の保脾湯
のゝ。癈人相應の業を調合ゝて養ゝゝ。其湯の内ゝ。

業の乳ゝ籠ゝてたゝる。ゝれど用ゝゝ人ゝ人ゝ養ゝ。ゝ物を
形ゝゝ用ゝ人ゝる。藥の乳い茶碗の湯の内ゝ繞て
ゝゝ。用ゝゝ人ゝ。ゝ乳ゝ内ゝゝゝゝ。陳皮
い陳皮の用と勧め。甘草い甘草の用と働き合ゝ其性
命と心ゝう。勧め行ふゝ人ゝれゝの癈ゝ癒ゝて又
神ゝ健固ゝ為ゝ本脾をゝると用ゝ世ゝうゝのゝで。天の繞
とゝゝ。此虚空の内ゝ天乳ゝ満ゝ。切てゝゝ乾ゝ変
化ゝ。空即是色光明遍照十方世界念佛衆生と所い
ゝ為ゝ。此念佛衆生とゝ一切万物のゝゝゝ。天の所徳ゝ光
明遍照とゝゝ。ゝゝ。ゝ一切万物ゝ名形と所ゝ

[illegible]なくゝ何を待ってそうた葉の浪のうゝ[illegible]ひ如ゐゝこん
苔不生こゝろるい赤くも天の本星天り。天地の如の胎
内こゝやどり。是夜御勅旁拾いこし光明遍照十方世界
へほゞゃゞ！と梅の花が咲き西本の本こゝ栗が出来柿の本こゝ柿が
出来る。其外一切万本こゝ菩提こゝ春雨のまさてそ
こゝは陽極ぐもうこゝる菩提の如のがさまゞ。一切の形
あるものい其ゝをつくしつくして切て吉凶命を正うし。真ゝ水
こゝほゝくゝあをゝゝぬ人い天こゝ住で天をゝゝぬ大海の真ゝ
水と心として水とゝゝぬ水中と激き回るい鱠がみゝゆゝゞや。
鱠いるの羽根ゞや。鳥が虚空を飛行とる舟の羽根と同

じゝゞゞや。人い天と心として天をゝゝぬ。知ゝぬとゞゞゞや。天い
無漏の大海ゞゞや。実とさして大哉とゝゝ。此乾元の天の腹
ゝゝ。はじゝ一切万物なるゆゝに海兄弟。釋迦も孔子も富士
の山も湖水も百姓も丁人も乞食も獄多も禽獸草本
其外江河の鱗類までも皆天の一腹で出来さるものゞや。
何と大なる哉ゞやないう。此尼理を極める神道儒道佛
道。尼い近きかあり我るを遠きに求む。神尼い睫毛儒
尼も佛尼も睫毛ゞや。乳を付て考へて居らゞじませ。道
い天地より先達てなるゆゝ一切万物はもゝと直ゝゝちい
ゝゝゝんと備りてある。名ゝゝゝゝゝゝゝ付さるものゞや。

又名がうけきび通用ゞ出来ぬ天地こゝも歌学ゞや。その名ゞ迷ひて雑説をる。其迷ひを云て毋る神道儒道佛道の教へ佛ゝつゝも神ゝつゝも。流ゝ付き名ゞや。爲ゝこゝ名のないさたゝ。かゝゝいつくゝぬる。今日ハ結構な天気ゞやてはゞゝまた。そのあ先きゝ結構な天気ゞや

天の戸を開く神代より若そらめて今ハ八数の世をたゞゝば天地いまゞ開けざる国より。国家孝行と唱てゐるゞゝ。ゝゝく孫むこゝい。夜昼夜ゞ流ゝけ気ゞや又夜も又さぬ夜ゞ寝むこゝい。ソリヤ盛人ちゞ屋屋切世るのゞや

天地の開けぬ先より揺らん玉ゝのゆの揺のこゝ名

思いこゝ名のないさたゝ。爲ハ思ハ爲ハ思ハ。警ハ白いこゝ名のない先ゝ白いを即云湯もおゞんもすまこゝ流ゝ付き名ゞや。名のないゝ。道のない心云ゝ心云ゝ心云ゝの神ゝ。

佛さまの華厳阿含法等般若法華涅槃も流ゝ付き名ゞやゝ。佛道こゝ名ゝ。三界唯一心心外無別法ゝ。心の外より別より法いゝ。佛さまの所説なさまこゝ

欲もとゞゝ佛のゝとゝ弱きゞ我心よりたづゝのゝる心の外より何ゞ。欲こゝ人ゝ欲けきゞ即心即佛。迷こゝ人ゝ毋ゝ尊ゝ毋佛ゞや。一切種ゝ心のゝ。ゝゝゞ種も大日種も法

華嚴も涅槃も何とも別のものでやない心が大事と
つとめるのじや。儒道とつとめる心のもの。書物に心の有書。後の世
と儒道とい。參乎吾道一以貫之と何と貫のじや。本心の
靈明のもとい邪妄心が三千世界を貫いてあるとつとめるのじや。
是則心の外一切の書物一字も外のものじやない。皆心のこと
じや。神道でも。日本紀旧事記抔の記事義其外神秘の
ものも書物皆神のものを書き書物じや。後の神道とい心の事
を私にそこつとつてこない。神道儒道一天人一致とは心が大事とつとめ神
の教へ此外に神道はいない。或い三教一致の心と考へ
引け登る林藤のもい多くんじ月じゃ最の月を見るうち

大山の林藤も樹も道がいるどのもうもうと登りて見まべで一つ
の月じや。其一つの月を。ものでもつとつ横ものと名と付樂しんである。
湖水の月。田毎の月。月の更科の月。武蔵野の月。こちの雲の泉水
の月多の神の月水満ての月。大の食事の月。小後田の月ぜん
ものを縄張てこちらもみな美じやくくと唯一つの月げを事とする。
三十仰向てみんなよい。蓮師の歌と
うつむきて案じてみてくも癖ものひが月と邪道と紀えうう
雲晴なる月い居るどうみるものとまけ出ることは迷ひもうう
此月とい心のもの。釋迦も孔子も石川五右衛門も獄多も乞食も一切
万物貪欲者本よりもるまで。天の御德の濁りてある心のたとへじや。

元生い人は靈明の德を備へてゐる者と知らねばならぬ。可惜
身でや。教を教へるに三教の区別や何よりも外の事でや
ないか心こそは我が備へてある道と知るのでや。心を離れて外に
道はない國の元い家になり。家の本は心にある。身の本は心にある。
一人食度なれば一國礼を記す。御地頭樣は仁徳なれば國中が
治る。一彩の内の旦那殿の心が大切。上清ければ流れ清し。
水と濁れば下は汚れる。上に立人は呵りてばかりいると。こと
いりのでや。我まゝ気まゝとも云へば。ホヽ〳〵〳〵
外〳〵いろ〳〵と人らを云ふ要捕と内〳〵やぶる栗のいがかな
國天下の反震も人の心一つ〳〵。心が大切でや。日て

彩に我〳〵が〳〵。朝夕神佛と礼拝をするに心の
吟味をするのでや腹の中に何なりと穢さぬいこい。先祖
の御心を背いせぬ。若得て濁りして人に難義とさせて
いねうと。こで已と責るのでや。已に克て礼に復るが人
のみちでやに。ゆんとうのいい物のまい我まゝ気まゝしく。
まつ〳〵いつて家内中と責回り。ごふ海ぬかうが
ねと。我がうう合点〳〵して勢へ入る。何の役に立ぬものや。
悪いの沢ひ入〳〵。こで善を揚さがよい。小人いろ〳〵さ
に悪と揚るゆへやうはいい。下雑の後の逆ひ附も。ちと了
簡して。其うまい附に養さがよい。長者に成さる

とも蓋て居らしませ。其時の長者屋の新いどんをあめ
ごや。あれ〳〵〳〵て。代物の安ぎごん〳〵とよる。さへ
掃そうじがらんと思ふてもゆ堪忍〳〵て。寿藁よ掃除ご
出来さと蓋る。そうとるとこ此そらひごでごく〳〵はしてさへ蓋
さんまを毎る。今度うるんと寿麗よせるやたらぬ。ひこう
膳出し旅〳〵さめごや。うで若と蓋さんとる。家内ごふ
こ〳〵して治る。皆心のよごやゆ。此道話も。御祖〳〵の心
のよごやとろふて出家るさるよい。皆たうさ方の此腹の
中のよはしごや。何も外のよごやない。家内和合ごゆ。縁も
久の御祈祷ごや。仕よいよの天上ごや。御高札と礼拝〳〵

親ゆ兄弟夫婦をはじめ諸親ゆ者はしく和合で蓋居
のごや。何よもいんらしいよいへ〳〵ぬ。是後親ゆ兄弟夫婦
和合〳〵。和人釋迦如来ご御出なされても。何よも用ごゆ
いゆ。孔ゆ様ご御出なされても。何よも云ゆごゆい。
はし〳〵其通りよ〳〵てうらひこんどんう。陸ゆ此親や
ようて。礼いよ〳〵此帰りうるさる
一下人ゆ。ゆるまで。是とのいはしひごで。是いる人うる人の心
解ごや　心せよ。侯も人のうらひこで。我うひこに物ひこうごで。
此世うよいよと。来云とる。流ご。ヲヲトよ〳〵とうぶ膳ゆを
ゆりかうぬぞ

一、世に人の業いとのく其業を為ん為に生れたる者。御主人を大切にとるが業にて人の為にや。仮令も百姓にしくて

忽ち天下の智人じや

一、家業とは、こゝに勝るものなく。此家業とい即天命じや。

天の九星二十八宿其外微塵のごとく種々様々で悉く

皆家業じゃ。何の為ぞ。御田を耕すのみが一切

万物を守護するが天の御職分。則御家業じゃ。その

天の御仕業のおうげで受る業にて其ものがきまぐで釋

迦如来い佛の為に御法をとるが家業。孔子様い天命を

御法をとるが御仕業で則御家業。其人方い上に御仕

をして下と御治め下さる御職分が御家業。侍い侍が家業。

百姓い農業が職分じや。丁人い丁人が家業。商人い商人が

家業。未屋い未屋。醫者い醫者。赤子い乳と飲が家業。

乞食い貰ひあるくが職分。をのく家業とは

あるものなく万事其分限をつべるぞ。此万事

い。我心を主帰るものじや。家内の諸色諸式。私が分多

をつかいせぬ。屋造り普請の入り。若物をつ強め

う。我分限をつかいせぬ。私しは何ものの徳がみて。此

やうにてゆるりのぞと。扨く吟味してみ我分限を

つかいれば。忽ち天地の智人ちるものを恐き慎むのじや。

如何なる小間物屋が結構な櫛出してもぬけさうなと
出たりのじやないぞ。者よつよい我心が勝いうぐや。一方
石い一方石のうどがある。美人い美人の御身の程がある。
殷の紂王。夏の桀王。身の分限よるこさおごり。我慢が身の
家業に驕り。終に天下を失ふ。況や世間者の落こた
身のうどをつぬ者同へだん〳〵ろ〳〵

道二翁道話五編巻之上終